

イワシ類シラスの漁場形成の研究

(我が国周辺漁業資源調査)

(予算区分 受託 研究期間 平成7年度～)

担当：水産技術研究所資源海洋科 永倉靖大

【研究の背景とねらい】

静岡県におけるイワシ類シラスの水揚金額は年間40億円を超えており、沿岸漁業で最も重要な魚種の一つとなっています。イワシ類シラスについて水揚統計資料の収集、漁獲物の全長組成や卵稚仔の分布などの生物学的特徴を把握することで、シラス水揚量の変動特性、漁場来遊群の大きさと沿岸海況の短期変動との関係について検討し、最終的には、シラス漁場形成機構を解明します。

【これまでに得られた成果】

- ・黒潮大蛇行時にはカタクチイワシシラス(カタクチシラス)が不漁となることが分かりました。また、暖水波及等の沿岸海況の短期変動(1~2週間)は、シラスの漁場加入に大きな影響を与える要因の一つとなっていました。
- ・漁獲の季節変動には4パターンが認められ、3月下旬~5月下旬のデータを基に年間水揚量が予測できる可能性が見出されました。
- ・漁期前に調査船駿河丸の調査結果に基づきシラス漁況の長期(1~2ヵ月)予報を行うとともに、漁期中に沿岸海況の短期変動に基づくシラス漁況の短期予測を試み、その結果を漁業者に広報しました。
- ・近年の漁獲量主体はカタクチシラスですが、マシラスの漁獲量は平成23年に440トン、平成26年に568トン、平成27年に960トンと増加しています。これは、マイワシ太平洋系群産卵量の増加傾向と合致した傾向です。

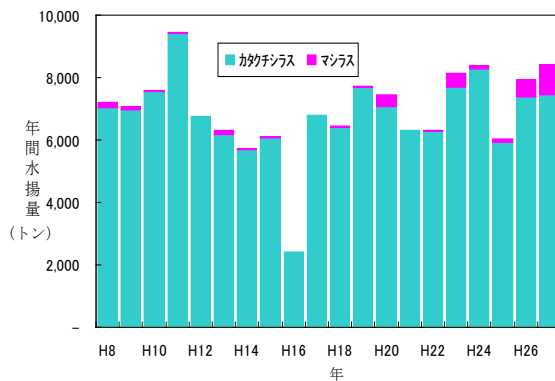


図1 県内主要6港におけるシラス種別推定水揚量の推移(平成16年は黒潮大蛇行で不漁)

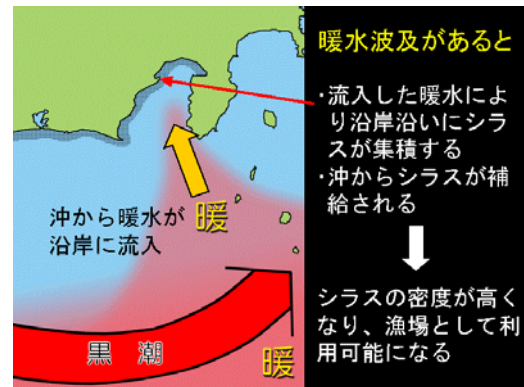


図2 シラス漁況に暖水波及が与える影響の推定模式

【期待される成果】

- ・シラス漁場形成機構を解明し、漁場や漁況の予測が可能となることにより、漁業者は計画的な操業が、加工業者は在庫管理等の面で計画的な経営が可能となります。

【今後の計画】

- ・漁場加入前のイワシ類シラス採集調査によって、種組成や分布状態などを明らかにし、漁場加入に至るまでの機構やシラス漁況との関連について検討します。
- ・漁場来遊量と海況の短期変動等との関係を明らかにし、シラス漁況の短期予測手法を確立します。

(作成 平成28年4月)